

野党は小渕政権をいかに攻めるのか

読売新聞編集局次長
橋本五郎



■“丸呑み丸投げ”内閣の強さ

小渕内閣を一言で表現すれば、さしずめ“丸呑み丸投げ内閣”とも言えるだろう。「丸呑み」とは、呑める要求はとにかく呑んでしまうということ、「丸投げ」は、例えば財政・金融は宮沢蔵相に丸

投げする、また重要な国会対策・野党対策は官房長官に丸投げするということだ。別の表現をすれば「無限抱擁型内閣」とでも言えよう。これはある意味では政権としては相当柔構造だと言える。

この内閣の強さのゆえんは、誰もが影響力を持って参加できる参加型内閣だということだ。こうなると参加した人は一所懸命やる。前内閣では「橋本氏のために火の中の水の中」という人はただの一人もいない。持たなくてもいいプライドが逆に政策決定を遅らせたりした。やはり土壇場で支える人たちがいないことが、政権の弱さとなって現れた。

以前は“党高官低（党が官邸より強い）”と言われたが、いまは全く逆の官高党低という状態だ。内閣の布陣にも党三役の布陣にもそれが現れている。同時に、なるべく総理がリーダーシップを発揮しているかのように偽装を凝らそうとしている。党も官邸を立てようとしている。実際は裏で野中官房長官を中心に、相当根回しをしている。小渕政権は事実上「野中政権」であると言える。

■組閣人事でのせめぎ合い

これら組閣や派閥の状況を見ると、おそらく小渕総理を含めてみんなが「この政権は一年間限り、同時に非常時の準備をしておく」と考えているのを見て取れる。党三役も単なる小渕支持の論功行賞ではない。例えば池田政調会長は加藤紘一氏の代理、深谷総務会長は山崎拓氏の代理である。森氏の三役入りは、三塚・森・小泉の三者三様の思惑の所産であると同時に世代交代の象徴であった。また誰も幹事長のなり手がなかったということもあった。つまり誰もが、基本的にこの政権は泥船だと認識している。政権に影響力を及ぼしたいが責任は取りたくない。だから次をうかがえるように代理を送り込んだ。しかも次が自民政権だとは限らない。みんなが身の処し方が難しくなり、押しつけ合いになる。押しつけられた最たる人が宮沢蔵相だ。加藤氏は橋本政権続投なら蔵相を狙っていたが、参院選敗戦のためそれは白紙になった。ところが野中氏は世間に何

と言われようが加藤蔵相を押し、泥船に乗せて心中させようとした。一方加藤氏は必死にそれに乗るまいと、宮沢氏を身代わりの山羊にした。次を狙う人、ここを何とか維持しようとする人の激しいせめぎ合いの所産と言える。

■いかに小渕政権を攻めるか

小渕氏は前総理と全く違って、カメレオンのようにどんな人間とも合わせられる。次の焦点は野党対策になると考えられる。自民党には金融のシステム法案関連でいくつかのシミュレーションがある。一つの極端なケースは、衆議院を無傷で通し、参議院では修正せずに否決され、両院協議会へ持ち込む。もう一つの極端なケースは、最初から丸呑みというものだ。情報開示、経営者責任の追及を進める。もう一つは議会政治の基本として、衆議院を通して、参議院の段階で丸呑みする。もちろんある程度の議論をする。一方では梶山一派が密かに野党と同じ要求をぶつけ、党の中で追い込もうという動きもある。

これに対して野党にはどういう攻め方があるか。第一は「参院選で自民は敗けた。総選挙で信を問うべきだ」と解散・総選挙を迫ることだ。確かに一つの理屈だが、自民党にとっても「衆議院で多数を持つ第一党であるから、政権の正当性において欠けていない」という厳然たる理屈がある。むしろ第四党の党首が首相になった細川内閣の正当性の方が問題になってしまう。また「支持率の低さ」というのも政治論としては成り立つが、逆に「内閣は発足したばかり。何をやるのか見てから批判するのが筋」というのも政治論だ。さらに自民党は「いま選挙をやっている状況ではない」という理屈を前面に出してくるだろう。これに対しては「今の内閣が信任されていないことが不景気を続けさせる」という政治論も成り立つ。国会でこれをどうやって説得力を持たせていくかが重要になる。

野党は小渕政権の丸呑みにどう備えるのか。政府自民党には「あれだけの金を投じて効果がないはずがない。今が底を打っていてこれから景気がよくなる」という意識がある。また支持率に関しても、当初の予想を上回っている。とにかく「なんでもやろう」としているから、9月になり、10月になってきて案外明るさが見えてくれば、かなり状況は変わってくる。野党各党はこれらのこともある程度念頭に置いておくべきだ。それと同時にこの政権は、官高党低でかなりのスピードで物事を決めていくだろう。野党は「小渕政権組みし易し」と侮ってはいけぬ。

8月6日 月例研究会より（要旨）